

和泉式部、保昌が妻にて丹後に下りけるほどに、京に過去「けり」体

歌合ありけるに、小式部内侍、歌よみにとられてよみ受身「る」用

けるを、定頼の中納言、たはぶれに小式部の内侍に、過去「けり」体

「丹後へつかはしける人は参りにたるや。」完了「ぬ」用

と言ひ入れて、局の前を過ぎられけるを、小式部の内侍、過去「けり」体

御簾よりなかば出でて、直衣の袖をひかへて、（みす）

大江山 いくのの道の遠ければ（なほし）

まだふみもみず 天橋立形・ク活用・已

とよみかけけり。思はずにあさましくて、「こはいかに。」過去「けり」終

とばかり言ひて、返しにも及ばず、袖をひきはなちて形動・ナリ活用・用

逃げられにけり。小式部、これより歌詠みの世おぼえ下二・未 完了「ぬ」用

出で来にけり。完了「ぬ」用

和泉式部が保昌の妻として丹後に下った時に、

都で歌合せがあったのだが、小式部内侍が（その歌合せの）詠み手に選ばれて

歌を詠んだところ、定頼の中納言がふざけて、小式部内侍に、

「丹後へ遣いにやった人は帰ってきましたか。」

と（局の中に向かって）言って、局の前を通り過ぎなされたところ、小式部内侍は、

御簾から体を半分乗り出して、（中納言の）直衣の袖をつかんで、

大江山から生野への道は遠いので私は天橋立に

行ったこともないし、手紙も見ていません。

と詠みかけた。思いがけず、驚いて「これはどうしたことだ。」

とだけ言って、歌を詠み返すこともできず、袖を引っ張って

お逃げになっちゃった。小式部内侍はこの時から歌詠みの世界で

評判が高くなっていったのである。